

青木 裕次

道は拙を以て成る

今

は亡き母が、常々息子の私に言っていた言葉がありました。それは「あなたは大器晩成」という言葉です。

大して勉強もせず、かと言ってスポーツが得意な訳でもなく、唯々ぼんやりと毎日を過ごしていた愚息に、母は呪文をかけるように、そう私に言っていたものでした。当の私は不遜にも、自分は大器晩成なのだと、その深い意味も知らずに思っていたところがありました。

しかし、高齢者の仲間入りをした今の私は、大器晩成と呼べるような者でもなく、最もシンプルで平均的な老人の一人として、世の中の隅っこで生きています。そんな私を空から眺め、それでも母は「あなたは大器晩成」と慰めてくれているような気がします。

大

分前になりますが、あるテレビ番組でのことです。人間国宝となつた匠に、アナウンサーがこう問いました。小さい時分から器用

でいらっしやいましたか。その質問に匠は、全く不器用でしかも要領も悪かったと答えながら、だからこそ今までこの仕事を続けてこられたのだと思うと加えて言っていたことを、時を経た今でも鮮明に覚えています。

彼は、同時期に一緒だった弟子達の中で、群を抜いて覚えが悪く手際も良くなって、人の何倍もの時間と手間を掛けて、やっと一つのことを修得することができるような塩梅。そんな自分が情けなくて情けなくて、何度も途中で辞めてしまおうかと思つたそうですが、その時、師匠が彼に向かってこう言ってくれたそうです。

不

器用な者ほど、職人に向いている。器用で飲み込みの早い者は苦勞がない分、出来上がった作品に深みと重みがない。また、覚えたと思つた技術を直ぐ忘れてしまう。しかし、不器用な者は、

人の何倍もの苦勞を重ね、やっと技術を修得するから、それがしっか

りと身に付き、作品の内側から深みや重みが出てくる。そして修得した技術は、その人が死ぬまで貫く揺るぎない一本の道となる。だから、職人は、器用な者よりも、不器用な者の方が向いている」

直向きひたむにこつこつと仕事に打ち込む人を、私は憧れを持って見詰めます。一家をなした人は、修業時代に決して誰よりも秀でていたとは限りません。こつこつと努力する人は、知らないうちに高みに登っているのです。記憶違いでなければ、川端康成が随筆の中でこんな事を書いていたと思います。

こ

こつこつと小説を書いていたら、何時の間にか自分が以前仰ぎ見ていた人と並んでいた」

全ての先生方がそうだとは言いませんが、手のかからない子ども達を教員は、得てして良い子と呼んでしまい勝ちではないでしょうか。不器用な子、手間のかかる子にも、こつこつと磨けば、輝く何かがあることを忘れたくないものです。

昨

今では、何事にもスピードが求められます。就職に際しても、職場で人を育て上げるという考えよりも、即戦力になる人材を求め

ています。転職斡旋業の宣伝をみればその最たるもので、採用側の一方的な御都合に立っていると云えるでしょう。

「文は拙を以て進み、道は拙を以て成る」

これは、明代末期の随筆集「菜根譚さいこんたん」の中の言葉だそうです。この言葉の意図するところに深く感じ入ります。

子

ども達を急かせるのではなく、じつくりと物事に取り組ませること、そして待つという姿勢が、教員にとつて大切だということを、忘れたくないものです。

(元青森県立北斗高校校長)